

オリジナル英語学習用ポッドキャストと WBT, ディクトグロスを組み合わせた授業実践

榎 田 一 路

広島大学外国語教育研究センター

1. はじめに

広島大学外国語教育研究センターでは、2008年よりオリジナルの英語学習用ポッドキャスト“Hiroshima University’s English Podcast”（以下「HUEP」）の開発および配信を開始した。日本国内の大学による有数の英語ポッドキャストとして、現在まで毎週、番組を継続的に配信している。

本稿では、同ポッドキャストを利用して、授業外の個別学習と授業内の協同学習を組み合わせる試みとして、広島大学の英語授業で WBT（Web-Based Training）とディクトグロス（dictogloss）を連携させた実践を行った。

2. 本実践の背景と目的

ポッドキャストは、インターネットを利用したメディア配信方法の一種である。音声や動画などの番組ファイルが、更新情報を記載したファイル（RSS フィード）とともに Web サーバに置かれ、視聴者は、Web ブラウザや、専用アプリを通じて更新情報を受け取り、ファイルをダウンロードする。インターネットとデジタルオーディオプレーヤーの普及を背景に、個人が手軽に発信できるメディアとして 2004～2005 年頃から盛んになった。ポッドキャストの特徴は、(1) 番組のダウンロードが可能である、(2) プッシュ型配信による番組の購読が可能、(3) MP3 など汎用性の高いメディアを使うため、クロスプラットフォームである、などが挙げられる。

現在、様々なレベルの学習者を対象にした外国語学習用ポッドキャストが配信されている。外国語学習において、ポッドキャストは無料で、好きな番組を、いつでも、どこでも、利用者の好みに応じて利用可能である。また、外国語教育においても、メディアのコピーや著作権処理などの煩瑣な作業を要することなく、コストをかけずに学習の絶対量を確保することが可能となる。

こうした可能性を背景に、広島大学外国語教育研究センターでは、2008年より HUEP の開発と配信を開始した。15～20 分程度の番組を、毎週火曜日に配信している。番組コンテンツの作成は同センターの Joe Lauer 准教授が行い、編集・配信作業は筆者が担当している。番組の配信は、番組の Web ページ以外に、iTunes などのポッドキャスト用アプリ、SNS（Twitter, Facebook）を通じて行っている。

現在、HUEP では対象レベルや題材の異なる 5 種類の番組を配信している。各番組の対象レベル、内容、2015 年 1 月 1 日現在の番組数を表 1 に示す。

HUEP の開発と配信、および英語教育への活用について、これまでに報告してきた取り組みを挙げると、開発に先立つ事前調査、配信システムの構築および教材開発、自学自習用教材としての試用、希望者を対象としたポッドキャストの活用による縦断的研究、授業の副教材としての活用、携帯電話への試験的配信、授業時間外の個別学習と授業内活動を組み合わせたブレンディッド・ラーニングがある。これらの経緯や、ポッドキャストのシステム・コンテンツに関する詳し

表1 HUEP で配信中の番組 (2015.1.1現在)

番組	対象レベル	内容	本数
アメリカ探究の旅	初級	アメリカ旅行を通じた日米比較	21
やさしい英語会話	中級	身近な題材のスキットで学ぶ会話表現	217
Joe のなるほど! 英文法	中級	日本人の間違いやすい文法項目を解説	3
異文化ディスカッション	上級	広島大学の留学生が出演するトーク	47
ドラマで英語を学ぼう	上級	名作・書き下ろし作品のドラマや朗読	32

い説明などについては榎田 (2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013) および Lauer (2008, 2009), Lauer and Enokida (2010) を参照されたい。

上記の取り組みを通じて、ポッドキャストを利用した多くの学生が、手軽で効果的な学習方法としてこれを肯定的に評価した。一方、教材コンテンツをネット配信しただけでは、それらを自発的に聴取しようとする学生は少なく、ポッドキャストによる自律的学習のきっかけを与えるためにも、授業等でまず一定期間、強制的にでも聴取を課すことは効果がある。これらの結果から、榎田 (2013) ではブレンディッド・ラーニングを試みたが、授業内活動の内容、時間、およびフィードバックが不十分だったため、学生から多くの改善点が指摘された。また、そこでは、ディクテーション、内容理解、要約といった、個別学習による受動的な活動しか扱われていない点も課題であった。

今回試みたディクトグロス (dictogloss) は、音声教材を、協同的かつアクティブな学習に応用する代表的な手法である。Wajnryb (1990) では、ディクトグロスの手法は以下のように説明されている。

- a. A short, dense text is read (twice) to the learners at normal speed
- b. As it is being read, the learners jot down familiar words and phrases
- c. Working in small groups, the learners pool their battered texts and strive to reconstruct a version of the text from their shared resources
- d. Each group of students produces its own reconstructed version, aiming at grammatical accuracy and textual cohesion but not at replicating the original text
- e. The various versions are analyzed and compared and the students refine their own texts in the light of the shared scrutiny and discussion

学習者は、まず個別の作業として、短い文章を聞きながらキーワードを書き取る。次にグループワークとして、各人のキーワードを持ち寄り、聞いた文章を復元する。ディクテーションと異なり、ここで作られた文章は必ずしも原文と同じである必要はなく、学習者は文法的正確さとテキストの一貫性を第一に留意することになる。このようにディクトグロスでは、聞いた内容を理解する能力に加え、各自の文法力を駆使して、正確な英語を書く能力も求められる。これらの作業をペアやグループで行うことにより、個別学習では到達が難しい目標でも、達成の可能性が高まる。さらに、完成した文章を原文や他のグループのものと比較することで、言語の形式に対する気付きが促され、より自発的で深い学習の促進が期待される。

本稿では、HUEP を利用した従来の受動的な個別学習に加え、協同的かつアクティブな学習として、ディクトグロスを扱った。HUEP のうち「やさしい英語会話」で扱われるエピソードは、多少の難易度の差はあるが、いずれも会話の長さやトピックがほぼ似通っている。また、スロースピードとナチュラルスピードの2種類の会話を用意されていることから、継続的にディクトグロスを行うのに適していると考えられる。次章では、今回の実践の概要について説明する。

3. 実践の概要

今回の実践の対象は、広島大学の1年生2クラス計86名である。いずれもリーディング中心の教養教育英語科目「コミュニケーションIB」のクラスで、授業は筆者が担当した。1つ目のクラスは理学部・生物生産学部所属学生（n=43）で、1年時5月に実施されたTOEIC IPテストの平均スコアは510、標準偏差は96だった。2つ目は教育学部所属学生（n=43）で、同じくTOEIC IPテストの平均スコアは549、標準偏差は87だった。このように、いずれも学内平均よりも上位の英語力を有する学生である。実践の期間は、2013年5月下旬～7月上旬の6週間である。

対象としたクラスは、広島大学の一部主専攻プログラムにおいて2011年度より施行されている英語8単位化対象クラスであり、外国語教育研究センターの「英語力向上WG」が中心となり、同一のシラバス、教科書、試験、評価方法のもとで授業が展開されている。授業はCALL教室で行われ、広島大学の標準的LMSであるBb9が利用されている（実践当時はWebCT）。授業は教科書を中心に行われ、授業時間外にもWebCTを用いた学習活動が課されている。さらに、外国語教育研究センターにより開発された「広大スタンダード6000語彙リスト」による毎週200語の単語学習が課されている。このため、授業時間外にこれ以上の大量の課題を課すことは学生の負荷を増やすことになり、授業内でポッドキャストを利用した活動は、毎回の授業の時間配分を工夫しても20分程度に限られる。

本実践においては「やさしい英語会話」ダイアログの一部を教材として使用し、(1)ディクトグロス、(2)WBTによるディクテーション、(3)日本語による要約作業、以上の3つの活動を中心に実施した。同じ教材を利用して、(1)は授業内の協同学習、(2)は授業外の個別学習、(3)は授業内の個別学習を課した。

教材はいずれも一般公開直前の会話を選んだため、学生はスクリプトや解説にアクセスができない状態での学習が求められた。まず(1)では、先に引用したWajnryb(1990)を一部改変した活動を行った。「やさしい英語会話」から抜粋した20～30秒程度の長さの会話を、2種類の速度で計3回再生した。初回は会話の一部をスロースピードで聞いて、メモ取りは行わずに大意把握を行うよう指示した。2回目・3回目は同じ英文をナチュラルスピードで聞き、キーワードのメモ取りを行った。この後、ペアあるいはグループに別れて、文法の正確さを意識しながら英文を復元した。復元した文章は用紙に記入させて回収し、教員が採点(3点満点)を行うとともに、2点以上の優秀な解答を電子化し、WebCTで共有した。

次に、同じ会話の全体を用いて、授業外に(2)の課題を課した。安田女子大学(広島市)で開発され、北辰映電株式会社から発売されているWBTオーサリングシステム「YASUDA SYSTEM」の一部、「KEDシステム」を利用した(図1)。同システムでは、入力された語句に対し単語レベルで正誤判断と正解率が即座にフィードバックされるので、聞き取れない個所に焦点を置きながら、何度でも音声聞き直して反復的にディクテーションを行える。学習履歴がWeb

サーバに記録されるので、学習者自身と教授者が学習の進捗状況をモニターすることが可能となる。このようにWBTを用いることで、紙媒体では困難な反復ディクテーション練習を自学自習ベースで行える環境を構築した。この中に「やさしい英語会話」のナチュラルスピードの会話を用いたディクテーション教材（各会話8問×6）を作成した。ディクトグロスで会話の一部を学習した後、学生は次回までに、同じ会話を用いた上記教材に取り組み、内容を把握しておくよう求められた。

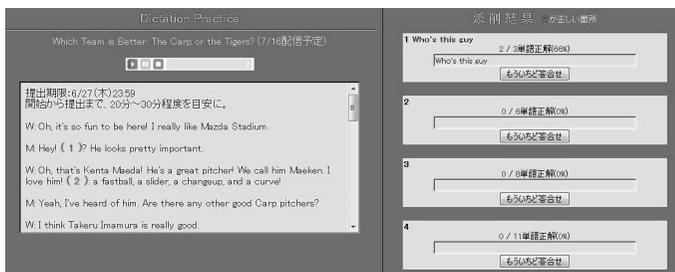


図1 KEDシステムの画面

こうして会話全体の内容を理解したと思われる段階で、(3)の活動を課した。ここでは毎回「何についての会話か (Topic)」「その Topic がどうだと言っているか (Main Idea)」「会話の最後に何が起るか (Ending)」という3つのポイントを中心に会話を要約するよう指示した。要約文は各ポイントに1点ずつ配点した計3点満点で採点した。

今回の実践で使用した会話を表2に示す。

表2 使用したエピソードの一覧

	タイトル
Week 1	Which beer is best?
Week 2	Seeing stars
Week 3	Which team is better: The Carp or the Tigers?
Week 4	A spy will sleep on the sofa
Week 5	Hiroshima's most famous actress: Haruka Ayase
Week 6	Police go after the bad guy (Dictation Only)

以上のように、広島ゆかりのスポーツや芸能人のような身近な話題から、天文学に関する多少学問的な話題、ビールの日米比較、ドラマ仕立てのスキットなど、幅広い内容を扱った。いずれも本実践で授業内活動を行った後に、一般公開した。なお、第6週は時間の都合で、授業外のディクテーションのみとした。

本実践の前後で、プレテストとポストテストを実施した。いずれもディクテーション10問と要約問題2問から成る同一の問題で、表2に示した6つのエピソードに加え、同じシリーズの他の会話素材も利用した。また、実践終了後に、対象学生にアンケートを行った。

4. 実践の結果

本実践の結果を、(1) ディクトグロス・ディクテーション・要約の各活動のエピソードごとのスコア、(2) プレテストとポストテストの比較、(3) 実践終了後のアンケート調査集計結果、(4) 自由記述によるコメントの4点により示す。

4.1. エピソードごとのスコア

まず、各エピソードを用いて行った活動の結果について、それぞれの平均スコアを表3に示す。

表3 エピソードごとの平均スコア比較

	Week 1 (Beer)	Week 2 (Stars)	Week 3 (Baseball)	Week 4 (Spy)	Week 5 (Actress)	Week 6 (Police)
ディクトグロス (3点満点, n=73)	1.73	1.83	2.16	1.76	2.06	N/A
ディクテーション (100点満点, n=68)	81.43	65.84	89.31	78.80	80.93	70.81
要約 (3点満点, n=74)	1.96	2.00	2.78	1.40	1.63	N/A

第3週がどの活動においても平均点が高く、逆に第4週が全般的に低めの結果となった。前者ではプロ野球という身近な話題が扱われているのに対し、後者は朝帰りの夫が妻に風変わりな言い訳をするという複雑な場面設定が原因で、やや難易度が高かったと思われる。ディクテーションと要約の点数を見ると、第2週では前者が全期間中で最低だったのに対し、後者は2番目に高かった。逆に第5週は、前者は高めだが、後者が第4週に次いで低かった。これはスキットの音声を正確に聴き取る練習が、必ずしも内容理解に結びつかなかったことを示している。

4.2. プレテスト・ポストテストの比較

次に、プレテストとポストテストの結果を比較した分布図を図2に示す。

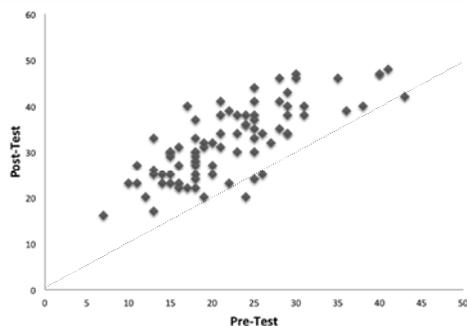


図2 プレテスト・ポストテストの比較 (n=84)

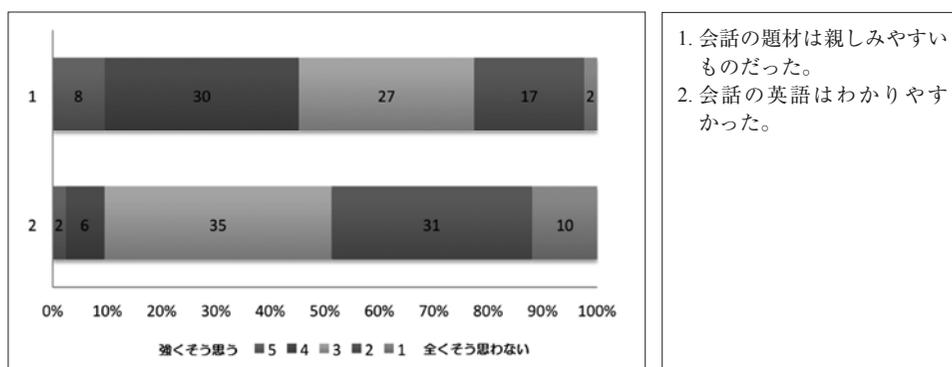
図2はプレテストの結果を縦軸，ポストテストの結果を横軸で表したものである。プレテストの平均は22.0（標準偏差7.6），ポストテストの平均は32.1（標準偏差7.9）で，6週間の実践を経てスコアの有意な上昇がみられた（ $t=17.4, df=83, p<.05$ ）。

4.3. アンケート調査の集計

実践終了後に，計11項目から成るアンケート調査を行った。調査項目は，ポッドキャストについて（2項目），ディクトグロスについて（3項目），ディクテーションについて（3項目），総合評価（3項目）に大別される。

アンケートは「強くそう思う」は5，「全くそう思わない」は1，中間の場合はその程度に応じた5段階評価を行い，マークカードにより集計した。この結果，計84名からの回答を得た。

まず，ポッドキャストについての2項目の結果を図3に示す。

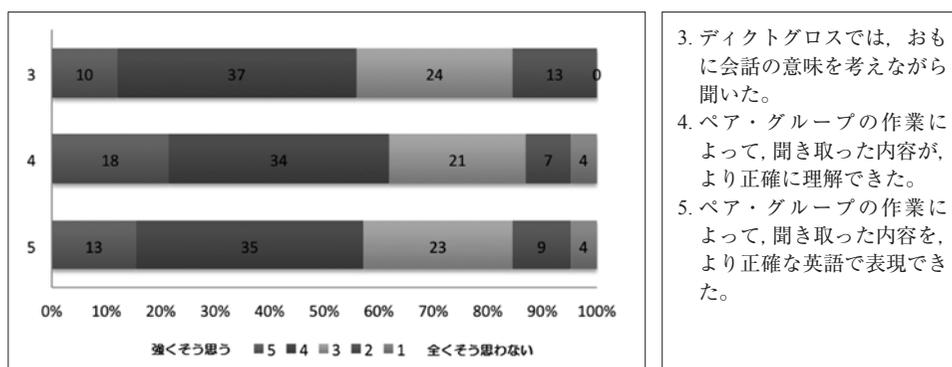


1. 会話の題材は親しみやすいものだった。
2. 会話の英語はわかりやすかった。

図3 ポッドキャストについて (n=84)

5段階中4以上の肯定的評価は，項目1は38名（45.2%），項目2は8名（9.5%）だった。前述の通り，題材の身近さの度合いにばらつきが見られたことと，会話でオーセンティックな英語表現が多用されているため，大学入学直後の1年生には難易度が極めて高かったことがわかる。

次に，授業内で行ったディクトグロスに関する3項目の結果を図4に示す。

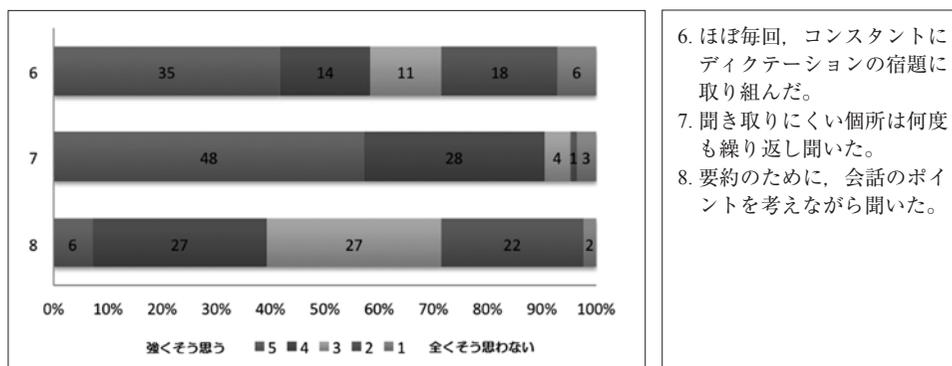


3. ディクトグロスでは，おもに会話の意味を考えながら聞いた。
4. ペア・グループの作業によって，聞き取った内容が，より正確に理解できた。
5. ペア・グループの作業によって，聞き取った内容を，より正確な英語で表現できた。

図4 ディクトグロスについて (n=84)

肯定的評価は、項目3は47名(56.0%)、項目4は52名(61.9%)、項目5は48名(57.1%)だった。項目3では、文法的正確さに留意して文章を再現するにあたり、まず内容把握に集中して会話を聞くことができたかどうかを問うもので、半数以上の肯定的回答が得られた。また、項目4と5では、ディクトグロスにおける協同学習の効用について、やはり肯定的評価が半数を上回った。

図5は、WBTによるディクテーションに関する3項目の結果を示したものである。

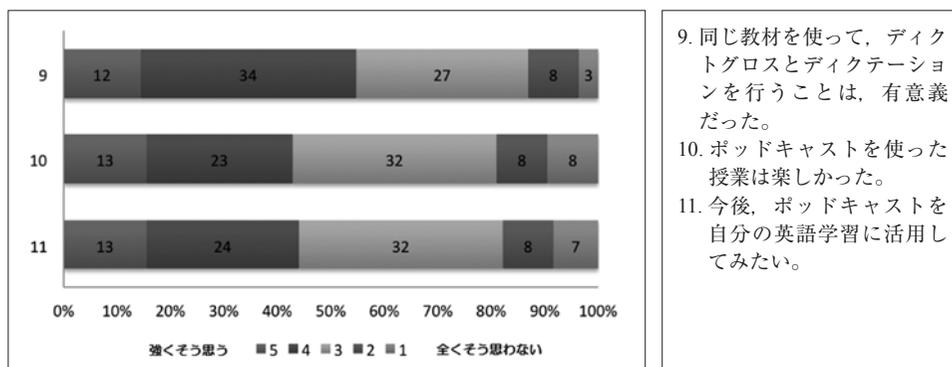


- 6. ほぼ毎回、コンスタントにディクテーションの宿題に取り組んだ。
- 7. 聞き取りにくい箇所は何度も繰り返し聞いた。
- 8. 要約のために、会話のポイントを考えながら聞いた。

図5 ディクテーションについて (n=84)

項目6の肯定的評価は49名(58.3%)、項目7は76名(90.5%)、項目8は33名(39.3%)だった。半数以上の学生が毎回の課題に取り組み、反復的にディクテーションを行ったことがわかる。一方、毎回同じポイントで要約を求められたにもかかわらず、会話のポイントを意識しながらディクテーションを行った学生は4割に満たなかった。これは表3で示した、ディクテーションと要約のスコアの不整合や、図2で示したポッドキャストの難易度の高さと、相互に関連している可能性がある。つまり、反復ディクテーションにより音声レベルでは理解できたとしても、会話の内容把握が困難だったため、ポイントをつかみにくかったと考えられる。

最後に、本実践に対する総合評価3項目の結果を、図6に示す。



- 9. 同じ教材を使って、ディクトグロスとディクテーションを行うことは、有意義だった。
- 10. ポッドキャストを使った授業は楽しかった。
- 11. 今後、ポッドキャストを自分の英語学習に活用してみたい。

図6 総合評価 (n=84)

項目9の肯定的評価は46名(54.8%),項目10は36名(42.9%),項目11は37名(44.0%)だった。ポッドキャストを利用した個別学習と協同学習の連携に対して、半数以上の肯定的評価が得られた。ポッドキャストを利用した授業への評価、およびポッドキャストの活用については半数を下回ったものの、図2に示された難易度の高さを考えると、ポッドキャストに対する肯定的評価の割合は決して低くないと解釈できる。

4.4. 自由記述によるコメント

4.3のアンケート調査の際、マークシートの裏面に、ポッドキャストを使った英語授業について「よかった点」と「改善すべき点」の記入を求めた。それぞれの代表的な意見を表4に示す。

表4 自由記述の代表的なコメント

よかった点	改善すべき点
1. リスニングの機会が増えた 2. ネイティブのスピードに慣れた 3. 文法、語彙、発音が学べた 4. ディクテーションはゲーム感覚で楽しめる 5. ディクトグロスはペアの人と補い合い、考えながらやれる 6. 同じ教材でディクテーションとディクトグロスを行うことで理解が深まった	1. 難しいものがある(やる気が出ない) 2. 専門用語が頻出する回は難しかった 3. スピードが速すぎる 4. もっと難しくてもよい 5. レベル分けがほしい 6. だんだんレベルアップする感じだったらよかった 7. ディクテーションでは要約を考えるよりも答えるところばかりに集中して何回も聞きすぎ、大意が把握できなかった 8. ディクトグロスのペアを組み替えてもよい 9. 音が小さい 10. (ディクテーション教材の) 巻き戻しをもっと便利に 11. 宿題を出してほしくなかった

よかった点の1~3.ではポッドキャストによる英語学習機会の提供、4.ではWBTによるディクテーションの効用、5.では今回のねらいである協同学習としてのディクトグロスの効用、さらに6.では個別学習と協同学習の連携による効用が指摘されている。

一方、改善すべき点の1~6.は難易度、7.はディクテーション、8.はディクトグロス、9.~10.は技術的な問題、そして11.は授業外学習の量に関する指摘となっている。教材の難しさの原因として、語彙の難しさ、スピードの速さ、学習者のレベルとのミスマッチが挙げられている。7.ではWBTを利用した集中的な反復ディクテーションを、内容把握と両立させることの困難を示している。8.で指摘されているように、今回のディクトグロスでは特にペアやグループの変更を行わなかったため、毎回の協同学習の相手が固定されてしまい、英語力の低い学生が高い学生に「ただ乗り」する現象が生じた可能性がある。11.に関しては、前述のように毎回200語の単語学習と教科書の予習が課されている中で追加の課題が与えられたことに、負荷を感じた学生もいたことを示している。

5. まとめと今後の課題

本稿で扱った実践は以下のようにまとめられる。

- (1) 半数以上の学生が、HUEP を利用した課題に継続的に取り組み、プレテストとポストテストの結果から、本実践を通じて HUEP の会話を聞き取る力に向上が見られた。
- (2) ディクテーションの点数はおおむね良好だが、必ずしもそれが内容把握に結びつかなかった。
- (3) ディクトグロスによる協同学習、およびディクテーションとディクトグロスの連携に対して、好意的なコメントが見られた一方で、ペアやグループの作り方には改善の余地が見られた。
- (4) HUEP では、オーセンティックな英語が用いられているため、大学1年生前期の段階で教材として利用するには、教材の提示方法や授業活動にさらなる工夫と改善が必要である。

最後に、今後の課題を以下に示す。

- (1) 初級者レベル向けのポッドキャスト教材開発
- (2) 過去6年間の HUEP の教材を、多様なレベルの学習者に対応するための工夫
- (3) 協同学習における「振り返り」の機会の提供

参考文献

- 榎田一路 (2008). 「ポッドキャストイングを英語学習に利用する上での予備調査とその考察—購読型教材配信によるモバイル英語学習システムの構築に向けて—」『広島外国語教育研究』11, 69-81.
- 榎田一路 (2009). 「英語学習用ポッドキャスト “Hiroshima University’s English Podcast” —オリジナル番組の制作と配信システムの構築—」『広島外国語教育研究』12, 71-81.
- 榎田一路 (2010). 「オリジナル英語学習用ポッドキャストの授業での活用」『広島外国語教育研究』13, 65-73.
- Lauer, J. and Enokida, K. (2010). A Longitudinal Study: The Effectiveness of Podcasts for Learning English. 『広島外国語教育研究』13, 75-91.
- 榎田一路 (2011). 「オリジナル英語学習用ポッドキャストの授業での継続的活用」『広島外国語教育研究』14, 71-82.
- 榎田一路 (2012). 「オリジナル英語学習用ポッドキャストの携帯電話への配信」『広島外国語教育研究』15, 75-87.
- 榎田一路 (2013). 「視覚情報を付加したオリジナル英語学習用ポッドキャストによるブレンディッド・ラーニング」『広島外国語教育研究』16, 1-13.
- Stockwell, M. A. (2010). Literature review: The theoretical underpinning of dictogloss. *Journal of Sugiyama Jogakuen University*, 41.
- Wajnryb, R. (1990). *Grammar dictation*. Oxford: Oxford University Press.

ABSTRACT

Combining Original English Podcasts, WBT, and Dictogloss

Kazumichi ENOKIDA

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

Podcasts are beneficial to language education in both supplementing limited class hours and providing students with enjoyable opportunities to immerse themselves in the target language. This is especially true at the tertiary level of English as a Foreign Language (EFL) education in Japan, where students are not given enough learning hours to improve their communicative skills in English. The writer has been involved in the development and delivery of original-content weekly EFL podcasts since 2008. Through the last five years of development and implementation of in-class, out-of-class, and blended learning activities using the podcasts, two major challenges have been identified. Firstly, providing fun and effective learning opportunities using podcasts could be the initial step to fostering autonomy in learning. Secondly, listening activities in the classroom should include more active learning activities, since traditional English listening classes too often tend to focus on individualized and receptive activities.

In this paper, in an attempt to address the challenges introduced above, a particular classroom practice is reported in which original EFL podcasts and Web-Based Training (WBT) were used for both integrating individualized learning outside the class and promoting in-class cooperative learning activities. This practice was conducted for six weeks in two classes for first-year college students majoring in science, applied biology, and education at a national university in Japan. Outside of the class, students were requested to listen to podcast episodes and work on online dictation practices using the episodes and “KED System” — a WBT authoring system developed by the writer. With the KED System, students can improve their listening skills through repeated dictation practices, after which they receive prompt feedback that allows the students to check their answers as often as they want. In addition, part of the class hours were devoted to two paper-based activities: summarizing the episodes the students listened to, and working in pairs/groups on the dictogloss activities using parts of the podcasts.

The findings of the paper are as follows: (1) A statistically significant increase ($p < .05$) was found between the pre/post test scores; (2) Despite their high performance in out-of-class dictation tasks, the students did not find it helpful in grasping the overall meaning of the dialogs; (3) Positive comments were found on collaborative activities involving dictogloss, while there was still room for improvements in how pairing/grouping can be done; (4) Further improvements can be made when utilizing Hiroshima University’s English Podcast in classes for first-year students.